

氏名	藤井 洸
ヨミガナ	フジイ サエ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第297号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 V. ベッリーニのオペラにおける劇的表現について 〈演奏〉 V. ベッリーニ作曲《夢遊病の女》よりハイライト

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	菅 英三子
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	吉田 浩之
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	川上 洋司
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	畑 瞬一郎
副査	東京藝術大学	非常勤講師	（音楽学部）	島崎 智子

（論文内容の要旨）

十九世紀前半のイタリアを代表する作曲家の一人として挙げられるヴィンチェンツォ・ベッリーニ。彼の美しい旋律の数々に魅了された筆者は、修士課程で《夢遊病の女》を取り上げて、そのヒロインであるアミーナの人物像について研究した。ベッリーニの音楽の魅力はその美しい旋律が代表とされるが、彼の音楽は『音楽の形式とベルカントへの嗜好が劇的な感情表現を封じ込めてしまっている。…（中略）… 旋律美の中に狂気が埋もれてしまう。』（水谷彰良：著『オペラ・キャラクター解説事典』より）と評されることがある。実際に彼の音楽を舞台で表現することは広い音域や細かいアジリタのパッセージ、長く続けられる旋律美など音楽技巧的観点から見ても、大変困難なことである。けれどもそれらの技巧的問題を解決したうえで、ベッリーニのシンプルかつ繊細な音楽を最大限に表現し得る演奏、美しい音楽の中に秘められた劇的な表現を最大限に表現し得る演奏が必ず存在するはずである。それは、演劇的要素を切り離したうえで、発声において声の響きの芯を変えろということではなく、美しい声・美しい響きで表現の幅はどれだけ広げられるのかということである。

第一章では《カプレーティ家とモンテッキ家》と《清教徒》を取り上げ、博士リサイタルへ向けて実践していく中で試行錯誤した歌唱に取り組む過程を、さまざまな歌手たちの演奏を参考にしながら考察し、さらにそれらから導き出した音型別演奏考察をまとめ、発声の観点からより技術的に整えられた取り組みを考察した。これらの考察から導き出されたものとは、美しい声や響きを犠牲にしてリアルな感情を表現することは必ずしも劇的表現とは一致しないということである。音型を一つ一つ分解して考えていくことによって、自分の実現したい表現や歌唱を完成させることにはならないけれども、発声において必要な要素を理解し、土台を形成することができるのである。また第二章では、第一章での考察を実際に舞台上で演奏するために重要となってくる要素や取り組みについて考察し、それぞれのリサイタルでどのような歌唱となり、どのような反省点が生じたかを考察した。これらの考察から導き出されたものとは、練習時に考察した「歌唱のための考察」を本番中に意識しすぎることは、歌い手自身の中へ声や表現を閉じ込めることへとつながるため、注意すべきであるということである。舞台上で歌唱のために意識すべきこととして挙げられるのは身体の緊張を緩めて、ブレスや支えを確保することである。最も大切なことは、この意識によってテキストやドラマを存分に表現した歌唱の際における、歌唱と表現のバランスであると考察した。声の響きを意識した歌唱とテキストやドラマを表現することは互いに影響し合うことであり、オーケストラと歌い手の音楽の合わせ方、舞台上における存在の仕方などをしっかり意識したうえで、この二つの関係をさらに効果的に演奏へと反映させる取り組みが必要であると考察した。さらに第三章では、《夢遊病の女》を取り上げて、第一章と第二章で考察した内容を生かして音楽に込められた表現を最大限に聴衆へ届ける歌唱を考察した。この考察から導き出されたものとは、その人物のキャラクターをより効果的に表現するために、美しい歌唱を土台としてより発展させて音楽を理解することの重要性である。非和声音と和声音、半音による響き、短調による音楽とテキストの関係など、ベッリーニの音楽には緊張と緩和が繰り返されていると考察し、その鍵となる音や旋律を理解したうえで第一章において考察した歌唱を実践することこそが重要であると考察した。

これらの考察から、ベッリーニの旋律美の中にある劇的表現とは美しい歌唱をもって表現されるものであると結論づけた。劇的表現を追い求めても、美しい歌唱がなければベッリーニの音楽に表現は生まれず、美しい歌唱のみを追い求めても、劇的な表現がなければベッリーニの音楽はただの音符の連続となってしまうのである。劇的表現が閉じ込められる歌唱とは、発声を重視した歌唱にばかり関心が偏っている歌唱であり、それは表現を重視した歌唱に対してほとんど関心がないものであり、美しい歌唱とはいえない。美しい歌唱と劇的表現がバランス良く保たれている状態が、ベッリーニの音楽における最もふさわしい演奏であると考えた。けれどもそれはベッリーニの音楽を糸口として、その前後の時代の音楽にも同様に生かされるべきことである。ベッリーニの音楽はベルカントとヴェリズモとの過渡期に生まれた音楽であるため、より技巧的な音楽の実現とよりリアルな感情の表出とをどちらも兼ね備えている。それゆえその両者の特徴から考察することによって、ベルカントの美しい歌唱とヴェリズモの劇的表現とがバランスよく保たれているべきものであるという結論に至った。劇的表現とは、ブレスによって表情を明らかにし、書かれている音の響きや音の流れに何も手を加えることなく声にすることによって生まれる表現である。現実のように怒り、悲しみ、嘆くことで生まれる表現は劇的表現ではない。さまざまな技術を身につけて書かれている音がすべて最も良い音色で歌唱されたとき、その音楽に込められた表現が自然と聴衆へ届けられるのである。ベッリーニをはじめ、これらの音楽の実現に向けては時間をかけて取り組むことしかできない。なぜなら彼らの音楽には確かな歌唱技術、テキストやドラマに対する深い理解、それらの表現を実現する身体的・舞台における演奏家的視点など、さまざまな要素がバランスのとれた状態で演奏されることが必須であるからである。

（総合審査結果の要旨）

「V. ベッリーニのオペラにおける劇的表現について」という題目で書かれた学位論文は、三章から構成されている。過去二回の博士リサイタルで取り上げてきたベッリーニのオペラ「カプレーティ家とモンテッキ家」「清教徒」の楽曲分析を行った第一章では、重要と思われるリズムや音型について演奏家としての立場から丁寧な考察を行っている。大変細かい作業

が繰り返されているが、その一つ一つが演奏における課題とそれに対する取り組みの試みであり、演奏法の考察として貴重な資料となっている。この丁寧な考察を今後も継続することによって、演奏家としての演奏方法論を形成し得るという指摘が口頭試問の場でなされた。また第一章から導き出された考察をもとに、二度の博士リサイタルでの演奏を振り返ったのが第二章である。演奏によってより明確になった課題を再考察することで、さらに研究内容が深まっている。続く第三章では、学位取得審査の演奏会で取り上げた「夢遊病の女」を考察し、ベッリーニのオペラにおける望ましい演奏表現についてまとめている。論文の中心軸は題目となっている「劇的表現」よりも「演奏法」「表現論」そのものとも言うべき内容に変化しているが、その変化自体が実は三年間の研究の積み重ねから生み出されたものであることをこの論文は物語っている。修士課程修了の際の論文のテーマもこのベッリーニの「夢遊病の女」であったが、正にこの継続された研究が、大学院音楽研究科の前期課程、後期課程を通して藤井が追い求めたものを浮かび上がらせている。口頭試問の場では、記述内容が題目として掲げられたものから変化していることや論文のまとめの部分について質問がなされたが、藤井自身がそれら指摘されたものが象徴する課題をよく理解、把握しており、今後更に研究を続けていく姿勢を示していた。

学位取得審査の演奏会では、オペラ「夢遊病の女」をハイライト形式で上演した。指揮者、演出家、助演メンバーたちのスケジュール調整など、全てをこなしながら演奏会を迎えるということは大変難しいことであるが、これらの経験は今後の大きな糧となることであろう。二度の博士リサイタルを経ての舞台は非常に完成度の高いもので、十分にこれまでの研究成果を披露するものとなっていた。「演じる」という部分が垣間見られたこれまでの演奏とは異なり、ベッリーニが描くアミーナの心情を深く豊かに感じさせる舞台であった。歌唱技術、表現方法について更に探求し、演奏家として大きく成長していくことを期待したい。

以上の所見により審査委員会において協議を行った結果、合格であると認める。